



学校法人
鎌倉女子大学

「子曰く、・・・」—素読の教育のすすめ—

ある日のわが家の夕食の時の話です。年老いた母が、ふと、こんなことを口にしました。

「私たちが学校に通っていた頃は、お弁当の時間に、『この食物が食膳に運ばれるまでには、幾多の人々の労力と神仏の加護によるものと感謝いたします。いただきます』、とクラスの皆でそう言って食べ始めたものだけど、今はそんなことなど、どこでもしないのだろうねえ」。

「へえ、いつの頃のこと」、と私は、応じました。

「そうねえ、中等学校の時だったかしらね。尋常小学校の時は、二宮金次郎の銅像に挨拶をしてから、教室に入ったわね。でも、ああいう教育も、今思い出すと、なかなかいいものだったわ、大事なことが知らず知らずのうちに身についてね」、と母。

確かに、昔の教育は、あれこれの理由を教える前に、まずよいとされることを幼い頃から素直に声に出し、形に表わし、実際に行ってみさせる教育でした。

ところが、人間が利口になったからなのではないでしょうか、最近では何事であれ、理由を説明してから教えることがいい教え方だといわれるようになりました。ですから、教えられる方も、多分賢くなったからなのではないでしょうか、何事であれ、理由を聞き質さないと、行動に移そうとしないといった風になりました。「何故、何々をしないではいけないのか」、「何故、何々をしてはいけないのか」と。

ですから、挙句の果てには、「何故、人を殺してはいけないのか」と、人殺しがいけない理由まで教えなければいけないといった昨今です。異様な殺人事件が頻発し、果ては親殺し子殺しと、それほどまでに世の中がすきんでしまったものですから、殺人がいけない理由まで教えておかなければならなくなったという、そこには皮肉な逆説があるのでしょうか。

無論、闇雲に強制することがいいことだとは思いませんが、しかし自明の理を幼い頃から自然に悟らせるためにも、却って理由の斟酌以前に、よいと思えることを実際に声に出し、形に表わし、行ってみさせるといった教育のもつ大切さをもう一度考えなおしてもいいのではないかと思います。最近流行りの「何故、人を殺してはいけないのか」といった件の問いだって、その議論をする以前に、そう問うこと自体が憚られるほど恐ろしいことなのだ、罪深いことなのだといった論し方もあるように思われます。

その昔、理由の説明なぞから入らない、しかし立派な教育がありました。その典型は、『仏典』や『論語』の素読の教育でありました。まだ小さい子どもたちが、机の前で姿勢を正し、大きな声で、「自ら仏に帰依したてまつる」とか、「子曰く、過つて改めざる、是を過と謂ふ」と唱和する、あの江戸時代の寺子屋風景に見られた教育の仕方です。

勿論、6才7才の幼い子どもに難しい釈尊や孔子の言葉、深い仏教や儒教の哲理が解る

わけがありません。しかし、理屈なく声に出した言葉は、頭の中、心の中に、というよりも、むしろ体の中に沁み込むもので、幼心に「仏さまを大切にしなければいけないのだな」、「間違っても、素直にゴメンナサイということが大切なのだな」、「先生の言うことは、大切なのだな」とは感じるもので、断片的であっても印象的な言葉は体の中に舞い降りて、大切にすべき物事に子どもの心を自然に向かわすようにするものなのです。

では、素読の教育で育った人に「何故」と問いかける学問的態度が身につかなかったかって…、そんな物言いは、物を知らない人の科臼^{かりぶ}に過ぎません。

私は、明治の人の学識の凄^{すご}みは幼い頃の素読の経験にあったように思います。森鷗外が『即興詩人』を原著を超える格調と誉れ高い雅文体^{がふんたい}で翻訳するかと思うと、他方で東洋の教養に通じた『寒山拾得』^{かんざんじつとく}を著^あらす、こうした例は、鷗外以外にも、紙幅^{しふく}が許せば、あの人の人この人と指摘することが出来ますが、この事実を見る時、私たち現代人は、日本人が欧米文化に触れて間もない時代、西洋思想を勉強するだけでも大変なのに、何て東洋思想にも造詣^{ぞうけい}が深いのだらうと驚くわけですが、そのわけの一つは、物心がつき始めた頃から仏書や漢籍を素読させられ、その素養を体に沁み込ませて育ったからで、私たちが思うよりも、彼らは案外それを容易^{たやす}くなし得ていたのかも知れません。

何事であれ、家庭において、学校において、社会において、理屈なく、昔からよいといわれることから始めてみる、教育とは、本来そうしたものなので、素読の教育の成果は、そのことをよく物語っているように思います。

本学の教員の方ですが、「親に感謝する教育から始めよう」といってくれましたが、私は、大変いい提案だと思いました。このような具体的な徳目を掲げた教育を提案したり、私のように素読の教育のすすめなどというと、ただちに徳目主義の教育だ、復古主義の教育だ、もっと子どもの主体性を尊重しよう、子どもの判断力を信頼しよう^と声高に批判したがる教育学者がいるものですが、主体性や判断力の何たるかもよく解っていない、どこぞの三文^{さんもん}教育学的理屈から始める教育は、どこか嘘の教育と心得ておかなければなりません。教育というものは、人類発生以来、人々の良識の中で立派に行われてきたのであり、ある時代から突然正しい教育が行われ始めたわけでないことは、あまりにも自明なことであるのですから。

[>前のページへ戻る](#)